

R. I. D

神風雲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新西暦98年

すべてのライダーワールドが結合してしまった世界で生きる戦士達の話

※物語を進める為に二つのストーリーを交互に入れていることが多いです。

目次

一話 「赤い血の主」	1
二話 「鋼の心」	8
三話 「父の意志」	13
四話 「還元される穢れ命」	17
五話 「試される世界」	29
六話 「欲望の糧」	36
七話 「時を駆ける列車」	42

一話「赤い血の主」

「さあ、もう一度始めよう。終わりなき戦争を」
それが最後の一言だった。

頭に突き付けられた銃口はデイバインアーマーで形成されたスーツの人間が持っているライドブツカードだ。

マゼンタ色のライダーは仮面の下でにやりと怪しい笑みを浮かべた。

「クソッ……」

力尽きた声が仮面の中に響いて消える。

「また、会おう」

目の前の空間が歪み、一筋の閃光が煌めいた。

そこで俺の意識が途切れ、再びあの日へと戻された。

壁に掛けられている時計が午後二時を刻む。

今日も一日が終わってしまう。今自分が何をしてきたかも忘れた。

かなり怠惰な生活を「乾浩人^{いぬいひろと}」は送っていた。

「俺何してたっけな……」

考えようとした瞬間、甲高いアラーム音に邪魔された。

振り向いて見張ると、電子レンジのランプが点滅していた。何かをレンジで温めていたようだが思い出せず、レンジを開けて中に入っていた食料を取り出す。

「そういえばこんなの温めてたな」

中にはコンビニで買ってきたカレーパンが入っていた。暖め過ぎたのか袋ごと熱い。

それでも我慢して中身を出すと、意外と熱くない事を確認した。口に運びこむと。

「熱っ!!」

パンの中に入っていたカレーが異常なほど熱く感じ、勢いで口から

出してしまった。

はふはふ、と口に含みながら息を出す。

「熱いものも食えないのかよ俺。これも親父のせいだな」
愚痴りながらもカレーパンを食べ終える。

丁度その時、玄関の方からインターホンが連続で鳴り響いた。13
階建てのマンションの一室に用があるのは大体あいつだ。

「おっはよー！ヒロクン」

インターホンの連打に加え、黄色い女声がマンションの一角に響く。相変わらず喧しい女だ。

「たしか今午後だよな」

「うんでもヒロクンは今起きたんだよね？」

「お前俺を引きニートか何かと勘違いしてないか？」

「やだなーヒロクン自覚してるんじゃないか」

このキャンキャン五月蠅い女は「木戸魅依奈」

俺が小さい頃、親父の友達で知り合ったのがこの女だった。当時からこの調子で狂わされている。

見た目は黄色いパーカーをいつも着込み、長い黒茶の髪の毛を後ろで括っている可愛い女性だ。中身はかなりの変態だが、見た目通りの性格ならば求婚をしていたところだ。

何よりこいつのウザいところは、俺の事を「クン」付けで呼ぶことだ。昔は取引先の娘と言う立場のためこの呼び方で通っていたが、四年前に親父が死んでからは「勝手に嫁候補入り」だった。

「まあ外でいるのもなんだから部屋に入……つてもう勝手に入ってるな」

俺の腕を潜り通って部屋に踏み入る魅依奈。

すると部屋に入るなり匂いを嗅ぎだす。とてつもなく無礼だ。

「カレーパン食べたでしょ。匂いきついよ」

無礼も無礼。人の部屋を臭いと言いだすのだ。

「うるせえよ！人が何食おうと勝手だろ！」

こう言う会話をほぼ毎日続けている。おかげで暇にならなくて良いことだがその代わり毎日がうるさい。

「キヤー!!」

そう、こんな風に毎日毎日悲鳴と轟音が絶えることは無い。本当に迷惑で仕方の無い。

「チツ、今度はなんだあ?」

マンションの8階から下を見下ろす。そこには異形の怪物と、それを取り囲む男三人。そして今現在襲われているであろう女性が一人突っ立っていた。

「どうする? 助けちゃう?」

俺には関係が無いことだ。だからあの関係に水を差す気も一切無いはずだ。

だが

「見てらんねえからな。それに近所で暴れられると迷惑だ」

御人好しで強者になった俺には見捨てられないのだ。

「それでこそヒロクンライダー!」

うるせえ、と文句を吐きながら俺は部屋の中に捨て置かれているケースを開き、中に収納されている一式を取り出して腰に装着する。異形の携帯を片手に部屋を飛び出し、急いで階段を下りていく。その最中も魅依奈は俺の側を着いてきた。

下へ降り、怪人と取り囲む男共の間を駆け出る。

「誰だお前は!」

幾度となく聞いたこのセリフ。響きの良いこの言葉を聞くと俺は敵を倒すことに緊張と好感を覚える。

「人様の家前でそんなことされるとこっちも日常困るんだよ。まあ俺にとっちゃ仕事以外のなんでもないからこれはこれでいいんだけどな」

「うるさい! 関係の無い奴は消え去れ!!」

怪人が何かの動作を始めた。それに勘付き、俺は咄嗟に携帯に「5821」を入力してENTERキーを押した。

《AUTOBAIN VEHICLE MODE》

すぐ隣の駐車場に止められていたメカニカルなバイクが急発進して怪人に突撃した。

その衝撃で体勢を崩した怪人は地面に倒れ込んだままこちらを睨んだ。

「つてーな！ほんとなんだよお前は!!」

「俗に言う仮面ライダーだ。別に言わなくても知ってるだろ?」

携帯に「555」のコードを入力し、ENTERを押した。

《STANDING BY》

アラーム音と共に機械声が鳴り、激しいバイブレーションが浩人を覆う。

変身用携帯「ファイズフォン」を持った腕を上へ突き上げ、こう叫ぶ。

「変身!!」

ファイズフォンをベルトに押し込み、水平な状態へセットする。

《COMPLETE》

ライダーズギアから流れ出るフォトンブラッドが体を包み込み、フォトンストリームを形成する。体を包む光が激しくなり、収まった瞬間には浩人の体をファイズギアが覆っていた。

体を流れる赤いラインに、機械的なボディ。そして『Φ』を模ったライダーフェイスはそのライダーを意味示していた。

「仮面ライダーファイズ。今日は覚えて帰れよ」

仮面ライダーファイズ。科学と知恵の結晶により生みだされた最悪のライダー。

装着者を最悪死に至らしめるベルト系列にあるが、中でも安全な方に位置する。その証拠にフォトンブラッドも一番出力の低い赤が流れている。

対オルフェノク用として作られたが、今はベルトの改良によって

様々な場面に適応できるよう作りかえられている。

「ここで降参して大人しく帰るか、ここで死ぬか。選びな」

そう言いながら俺は腰に装備されてあるファイズポインターを右足にある装着穴へ装備する。最後にファイズフォンに付属されているミッションメモリーをファイズポインターに差し込めば準備は完了だ。

「そんなもの！俺にはもう時間が無いんだ！オルフェノクとして生まれた俺にはもう！」

「そういうのどーでもいいから。さっさと選んでくれる？こっちは食後で運動したくないんだよ。その見た目吐きそうだわ」

「なんだと・・・ッ!!」

わざと挑発する。怪人はまるでナマコやウミウシのような気持ち悪い見た目のため、早く殺したいのは事実だ。

いずれにせよ奴がここで殺されようが逃げようが、この国の警備態勢に捕獲されて死ぬだけだ。

怪人に生まれた運命は最初から決まっているものだ。

「決めたよ、ここでお前もこいつらも！全員殺して死んでやるう!!」
情けない雄叫びを聞いたことを確認し、ミッションメモリーをファイズポインターに差し込んだ。

《READY》

「うおおおおおおお!!」

気持ち悪い怪人がこちらに走り襲ってくる。この場面に俺は何度も居合わせ、何度も目の前の敵を狩ってきた。

そして今回も、ファイズフォンのENTERキーを押した。

《EXCEED CHARGE》

右脚にフォトンブラッドが集中し、大地を蹴った。

空を仰ぎ、右足を怪人に向ける。足先のファイズポインターから円

錐状の赤いラインが飛び出し、怪人をポイントとして拘束する。

そのままポイントに向けて脚を蹴りだし、フォトンブラッドの引き寄せる力で一瞬視界から消えるように見える。実際は目標にヒットしており、その際に敵体内に猛毒のフォトンブラッドを流し込んでいるのだ。

最後に姿を現した時はすでに怪人の背後で脚を突き出して立っていた。

「うう・・・がア・・・アア」

怪人の体を襲う衝撃と共に体に「Φ」のマークを浮かび上がらせて灰化して崩れ落ちた。

文字通り、灰と化したのだ。

さつきまで目の前で威勢良く踊っていた奴が気づいた時には粉々だった、と言うのはあまりにも呆気無く、だがそれでいて妙な満足感がある。

本来ファイズギアはオルフェノク適正のあるものが装着できる物だった。まるで友撃ちのようだが、今の浩人はオルフェノクではない。

「今回も早く終わったね」

魅依奈が傍に駆け寄ってきて感想を述べる。

「早めに終わらせてえだろ。食後にあんなの見せられちゃあさ」

「そうだね。たしかにあれはキモかった」

感想を文句と無慈悲に変えつつベルトを外し変身を解いた。

後ろに立っている「関係者」との話は警察やら何やらに任せて俺達は部屋に戻った。

新西暦98年。この世には怪人蔓延る異世紀と化していた。

そんな危なっかしい世の中で一際正義を誇る存在が、俺達「仮面ライダー」だった。

二話「鋼の心」

小さな地球ほしの話をしよう。

そこは宇宙の片隅に芽生えた小さな人種だった。そこで彼らは文明を築き、独自の発展を遂げた。すると世界はある疑問にぶつかった。

「もしあの時、あの場所で、別の選択肢を選んでいたら。人類はどうなっていただろう」

全てはそこから始まった。

様々な文化を持った世界が融合を始めたのだ。

それはそれぞれの世界に崩壊をもたらさずだった。

そう。この物語も、全ての分岐の一つなのだ。

意思を持った生命が誕生した瞬間、この未来は予期できるものだった。だが彼らはそれを自ら受け入れた。

これはそんな彼らの。闘争本能のままに戦う “オーバーワールド超世界” の物語。

「やっと一段落着いたぜ」

砂埃舞う土木工事現場。

土臭いこの場所で部下達を指揮するのが俺の仕事だ。

「主任！大変です」

「どうしやがった？開通用のダイナマイトでも爆発したか？」

今、俺の事を主任と呼んだのは部下の石垣いしがき慧だ。

俺の事を慕うこいつは常に周りを監視し、問題があればすぐに報告してくる僕のような存在だった。

「違うんです！作業員の一人が怪人になって襲ってるんですよ！」

「それは忌々しい事態だな」

とはいう物の、一切驚く身振りをしないことから慧が怒りながら必死に伝えてくる。

いくら責任者だからと何もかも俺に任せないでほしい。たまには

自分達で何とかしろ・・・とは言えないから怪人なのだ。

「仕方ねえ。俺が行く」

そう言い残し、俺は先に作業場へ向かった。

現在新たに新幹線用トンネルを作っている最中で、それ故作業員も多くいる。その中に怪人の適性を持つている人間がいても不思議ではないし、それを差別してクビにする気もない。むしろそちらの方が恨みを買って襲われる可能性が高い。

そして今回の作業にもそのような可能性を考慮していた。その対策として呼ばれたのが俺城嶋紫朗だ。

未開通トンネルの中に入ると、一塊りになって逃げ出す人の群れに当たった。

話を聞くとこの先の採掘機の手前で暴れていると言う。先に進むと、トンネル中を照らす照明がいくつも壊れ、並べられている機械も無造作に捨てられていた。

歩いて行くと先に一人の男の姿が見えた。

「逃げ遅れか？怪人が出たらしいから早く逃げた方がいいぞ」

と、明らかな口調で嘘を吐く。

この状況で逃げ遅れは死につながる。つまりこいつが犯人だ。

「そうですね。とりあえずあなたを倒してから逃げますよ」

「お？俺を誰か知ってて言ってるのかな？」

男は苦笑し、ゆっくり近づいてくる。

「どうでもいいですよ。あなたが誰かなんて」

胸ポケットから長方形のメモリを取り出し、スイッチを押した。

「こいつがあるんでね」

《アノマロカリス》

機械声が流れ、首の付け根付近にメモリを指した。

すると体に変化し、博物館などにありそうな古代生物の怪人へと変身した。

「おー今回は古風だねえ。じゃあ俺もやらせてもらおうか」
赤と黒のメタリックな機械を取り出し、腰に当てるとベルトが自動で装着された。

そして男と同じように胸ポケットから長方形のメモリを取り出す。それはガイアメモリと呼ばれる地球の記憶が封じ込められた、言わば情報の結晶体だ。これを体内に取り込む、あるいはその力を引き出す装置を使用すると、一時的にその力を利用できる。

その装置の一つが今腰に装着した「ロストドライバー」だ。

《メタル》

メタルメモリ。これが俺の相棒だ。

メモリをドライバーのスロットに差し込み、右手を誘導して展開する。

メタルの発声と重低音の音楽と共に体に鋼鉄の鎧が纏い、右半身左半身を分ける様なラインのあるスーツが形成された。背部には金属の棒のような物も装着されており、その変身は正に一瞬だった。

「お前は何者だ!？」

「仮面ライダーメタル。お前を地獄に送る業鉄の戦士の名だ！覚え
ておけ」

メタルメモリは鋼鉄の闘士を持ったメモリ。最大の腕力と防御力を誇り、攻撃的な武器「メタルシャフト」で攻撃する。さらにシャフトにはマキシマムコンバーターと呼ばれるスロットがあり、これにより強力な一撃を放てる。

対して怪人側のメモリは強力だがその分肉体に対する影響力が大きい物だ。ドーパントメモリはそれ故危険で怪人を大量生産してしまう。

「それにしても水も無いのにアノマロカリスとはな。場所が悪すぎ
た」

「たかがその程度で勝ったつもりか!!」

もちろん敵は怒って攻撃してくる。口から粘膜のようなものを飛

ばし、こちらに突撃してくる。

その粘液をシャフトで弾き返しつつ、歩いて接近する。何ともひ弱で戦いがいの無い攻撃だった。

「威勢がいいのは怪人の特徴なのか？どうでもいいが」

俺がここに配属されたのはこういう輩を排除するためだ。こんなふうに。

「そろそろ飽きたな。終わらせるか」

「そう簡単には!!」

ドライバーからメタルメモリを抜き、メタルシャフトのスロットに挿入する。

敵も同じような攻撃しかしてこないため、力の加減を見誤ったか、ただの雑魚か。

《メタル マキシマムドライブ》

メタルシャフトを前に突き出し、そのまま突進する。その際の衝撃で放たれていた粘液は全て弾かれ、その距離が急激に縮まる。

敵ドライバーも抵抗しようと連射を早めたり鞭の様な触手を叩きつけに来たが、頑張りも空しくメタルシャフトはアノマロカリスの体を引き裂き、貫いた。

攻撃を諸に食らったアノマロカリスは爆発し、飛び出て来たアノマロカリスメモリを破碎しておいた。

「こつちも一段落着いたな。まったく仕事とはいえここまで弱いと困るな。平和すぎても食っていけないってことだな」

自分で納得しながら変身を解き、工事現場を後にした。

「主任大丈夫ですよね」

「心配もしてくれないのか。殺生なやつだな」

「主任の実力を信頼してるってことですよ」

オーバーワールドとして世界が変わってから一世紀近く経ったが、この世界では俺の様な傭兵業に付く者も多い。俺の様に運良くライ

ダーベルトを入手するとこの世界では幸先良い事間違いない。

「俺も主任みたいにできたらなあ」

「俺は運が良かったからな」

そしてライダーとして活躍すると、俺の様に信頼を簡単に得ることが出来る。

全てのライダーの世界が融合したからこの結果になったのだろう。だからこそ俺は今の生活が手放せないようになっていた。

そして、この仕事を受けた時、俺は今までの生活が出来なくなった。この事実を知ってしまったからに、俺は全ての生活を投げ捨てた。

「あるライダーを倒してくれないか？」

三話 「父の意志」

「ヒロクンただいまー！」

今日もまた奴が来た。まるで俺の部屋を自分の家の様に“帰宅”し、自分の部屋の様に寛いで行くのだ。怒りは無いが邪魔で仕方ない。

「ヒロクン掃除ぐらいしなよー！」

そしてうるさい。

「助けてー！」

外もうるさい。

仮面ライダーという仕事は疲れるものだ。毎日毎日マンションの前で騒ぎを起こし、人質を取り、無駄に人を殺し、無残に灰に帰す。まったくつまらない日々だ。俺が住んでいる地域じゃ精々民間人に扮した温暖な敵が多い。敵と言うよりは制御が効かなくなった怪物なのだが。

「なんか色々疲れた」

「そりゃ毎日蹴って殴ってじゃ腰や肩にくるだろうね」

「そうじゃなくてだな・・・」

敵は湧くがあまりにも平和すぎるこの生活に飽きていた。そこで気分転換に魅依奈を連れて遠出してみることにした。

場所は適当。風邪の向くまま気の向くまま。放浪の旅に出て見たのだ。

オートバジンで海道沿いを走りながら潮風を浴びていた。オートバジンが錆びるか心配もしたが細かいことは気にせず走りまわった。すると何の導きか、昔の実家、親父の経営していた会社の本社に着いてしまった。

「久しぶりだねー」

「そうだな・・・」

周りの風景と合わない高層ビル。妙にあしらった緑。そして変にアレンジのかかった「SMART BRAIN」の文字。

昔は家電から高校に至るまで様々なものを作ってきた大企業だった。だがオーバーワールドとして世界融合が起こってからは事業が衰退し、親父が死んだのをきっかけに会社は倒産、別会社の下敷きとなって今は形だけしか残ってない。

そして、親父が死んでから一年経った頃に届いたのが「ファイズギア」だった。

「入れるのかな？」

「たしかここのロックはパスワード式だったよな」

オートバジンを入口付近に置いておき、ビルの裏口へ回る。裏口の自動ドアの前でコードを入力する。昔の記憶を頼りに入力してみたが案外上手く行つた。さらに指紋認証も自分の登録されていたので難なく入れた。

「臭いな」

「ほこりっぽいね」

床も白く埃が乗っていて、家具やらは全てない。

地下発電で多少の電力は残っていたため、エレベーターでの移動が出来た。最高層フロアへ移動し、ドアが開くと、以前親父が使っていた部屋が現れた。

「懐かしいな。俺もよくここで遊んでたな」

「私と一緒にね」

「騒がしくてよく怒られてたけどな。主にお前が」

「うっ……」

埃の積もった社長机を確認し、引き出しを開けて見る。

何か入ってないか確認し、隣の本棚も確かめて見る。昔よく調べられなかった所を重点的に調べる。

「何してるの？」

「何か目ぼしいものがないか調べてる」

「……なんか泥棒みたいだね」

「一応ヒーローっぽい仕事してるんだからそういう発言は良くないと思うよ!?!」

そう話していると一冊の本が手に取れた。大きさに対して重さが

おかしかつたため、ページをめくろうとすると固いプラスチックに当たり開けなかった。

試しに表紙だけをめくってみた。すると本の中は空洞で、赤い腕時計が入っていた。

「なんだこれ」

「デジタル時計？それにしては変な形してるね」

「ああ、でもこれ・・・」

一目で分かった。それがファイズギアのオプションだということに。画面の横に付属しているパーツは紛れもないミツシヨンメモリだった。

俺はそれを左手首に装着し、妙な悪寒を感じて外へ出た。

「腹減ったから飯にするか」

「そうだねー。ここら辺どんな店があるかな」

魅依奈がスマホで近くの店を調べている間に俺は腕時計をギアのケースに収納する。丁度それらしきスペースがあったためすっぽり入った。

検索の結果、近くのラーメン店に行くこととなって、バジンを走らせた。

「親父・・・」

先週、親父が倒れたと連絡があった。そこから葬式までの準備はとんとんと進んだ。

当時俺は21歳。大学に通うために一人立ちしていた。そんな平穏な日々を訪れたのがファイズギアだった。

「なんでこんなもん持ってたんだよ」

スマートブレイン製の改良型ファイズギア。そう説明書には書かれていた。親父の遺書らしきものと共に。

内容は実につまらない物だった。オルフェノクがどうだとか怪人を倒すだとか。正義がなんだって言うんだ。それでも俺はギアを装着してしまった。

《READY》

気が付いたらファイズショットを腕に装着し、殴りかかっていた。

《EXCEED CHARGE》

罪悪感はない。むしろ人助けをしたような喜びと達成感に覆われる。

だが俺はそれを単なる闘争本能ではなく、正義感と勘違いしてしまったのだ。

人間と言う存在からかけ離れた者達を地獄へ屠る存在「ファイズ」へと俺は変わって行った。

四話 「還元される穢れ命」

俺は今日、ある仕事を受けるために名前も知らない大企業のところへ行った。

オーバーワールドの企業は多いため、全ての名前を覚えるには聊か難がある。

「今日は君に討伐依頼をしたい」

画面越しで声が聞こえるが、顔は仮面で見えない。鳥の羽根の様な洒落た仮面だ。

「何を倒せばいい？」

俺達傭兵は怪人や怪物のことを「誰」とは呼ばない。それはもう人間を越えている「物」でしかないからだ。

「目標は何でもいい。ただそこから出てくる最終目標を倒してくれれば」

「その言い方だと敵は複数いるのか？」

聞いてみるが画面に別の画像が映される。そこには建築中の大型タワー「ホープ・キーズ」が映っていた。

「数日後、建築中のタワーが完成し、式典を行う。そこには各国の首相や代理が訪れる」

「つまり護衛ってことか？」

「いや、今回は討伐だ」

要約すると。

数日後の式典はデマ情報で、本来の式典は中止になったそうだ。その理由が一部の企業からの暗殺依頼を受けた怪人の襲撃。

ただでさえ混乱を引き起こしている現在の地球。そんな状態を望む人間からの物理的攻撃だ。

「つまり嘘に惑わされて来たアホな怪人をブツ倒せばいいんだな」

「そういうことだ。ただ数が多い。そのために今回はもう一人プロを呼んでいる」

入ってくれ、と呼ぶと後ろのドアから俺の横に歩いてきた。

正装でイケた面。表情は若い男だった。

「お初にお目にかかります。宮井明みやいあきらと申します」

表情と同じ甘ちゃんのような雰囲気だ。少し戸惑いつつ

「おう、俺は城嶋紫朗だ」

「お互い自己紹介が済んだね。二人とも頼りにしているよ」

本番は三日後とのことでその日はそれで解散した。

当日、式典風に飾り付けもして、観客もいる。さらには首相の影武者が式典に出席するという大掛かりな嘘だ。

さらにそのエキストラもライダー系のベルトを装着できるというのだから驚きだ。

「金かかってんなあ・・・」

「鴻上ファウンデーションは工業事業に加え、メダルを利用したらイダーベルトに多く携わっている巨大財団ですから」

宮井明が詳しく説明してくれた。噂だけで聞いたのだが、こいつは自神宗教信者らしく、本気で神の使者と思っているらしい。

それを聞いたときはこの年齢で中二病をこじらせてるのかと思っただが、こいつの強さは実績が証明していた。

「ウワオオオオオオオツ!!」

地面が揺れ、観客席に悲鳴と足音が沸き立つ。同時に周辺の間人が怪人へと変化していき、こちらに攻撃を仕掛けてきた。

「来やがったな!!」

ロストドライバーを装備し、メタルメモリを出した。

《メタル》

「変身!」

スロットに押し込み、ドライバーを展開。音楽と共に鋼鉄のスーツが体を纏い、仮面ライダーメタルが現れる。

「行くぜ」

対して明は青と白の特徴的なベルトを腰に巻き、手の平サイズのナツクルのような物を手の平に押し付けた。

《レ・デ・イ》

「変身」

ポーリングを決めつつナツクルを腰のベルトに押し込む。

《ファイ・ス・ト・オ・ン》

ベルトから光が染み出し、空中でスーツを形成して装着された。

白い鎧に十字架を模った頭部フェイス。それはまるで聖職者のような神聖さを感じる物だった。

ベルトからは壊れかけの電子音のような声が聞こえたが、この姿を見た時に全てが繋がった。

「仮面ライダーイクサか」

「よくぞ存じで」

化石レベルのライダーだ。対ファンガイア用に作られ、その後も何回ものアップデートで改良されてきたパワースーツだ。

「では行きますか」

「戦いの神様がいたんじや俺も活躍できないかもな」

本来『Intercept X Attacker』の頭文字を取ってイクサなのだが、その戦いぶりから『戦いの神』と言う意味合いで「戦^{イクサ}」と呼ばれていた。

「私に後れを取らないよう、頑張ってくださいね」

恐ろしく優しい声でイクサは腰の剣を掴んだ。

だがこのイクサは俺の知っているイクサの姿ではなかった。頭部には神父帽のようなものが付いているし、さらに腰から垂れ下がる白いマントも神父のようなイメージを植え付ける。

「負けらんねえよな!」

シャフトを振りまわし、ミイラの様な敵を叩きのめす。すると時々コインのようなものが零れ落ちた。

「なんだこれ」

「それがセルメダルですよ。ヤミーが落とす欲望の結晶・・・なんと汚らわしい」

いかにも聖職者のような発言をする。こういう信者は俺のような無宗教信者にとっていろんな意味で敵に成り得る。

それにしてもセルメダルとか言ったか。金が稼げそうな仕事だ。

「意外とこいつら固いな」

叩いても殴ってもメダルしか落ちないため、ダメージを与えているのかが分かりづらい。

周りを見て見ると、首相の影武者や客席にいた民間人に扮した関係者達が次々に変身している。

一人はベルトにセルメダルを入れて変身している者。さらに別の一人はベルトをスライドさせただけで変身している者もいる。

ああ言った簡易ベルトは大体量産化された企業ベルトで、訓練したら誰でも装着できるように作られている。

「あんなのもいるんだな」

対して神父ライダーは十字架を摸した大剣を振りまわして戦っていた。斬撃音も壮快で、切れ味が良さそうだ。

俺のメタルシャフトでは斬撃はできない、その代わり打撃攻撃の最高威力を叩き出すことは出来るが。

そこへ周りと少し違うミイラが接近してきた。構わず叩くが他のヤミーに比べセルメダルが落ちない。

「こいつツッ！」

力を込めようと振りかぶった瞬間、強化されているであろうヤミーはメタルコートの胴体に蹴りを入れてきた。

体が宙に浮き、少しばかり飛ばされた。

「普通じゃねえな・・・慧!!」

俺の子分的存在、石垣慧を呼ぶ。すると会場の裏側から待ってましたとばかりに飛び出してくる。

「はい！主任！」

透き通った返事と共に慧の後ろを多数の弾丸が通り過ぎる。さらに爆発、爆風が彼の背中を覆う。一瞬目の前の閃光へ溶けたが、すぐに彼の生存が確認できた。

「なんか後ろが騒がしかったですけど何とか来れました」

「お前なあ・・・」

今までこいつと一緒に行動を共にしてきたが、こいつはつくづく運が良い。

「やっってくださいよ主任！」

そう言っただけで俺に赤いガイアメモリを手渡す。

「お前の力使わさせてもらうぜ」

《ヒート》

熱き記憶を内包したガイアメモリ「ヒートメモリ」

闘争本能を掻きたて、強烈な炎を内に秘めさせる最高のメモリだ。

俺はそれをメタルシャフトのマキシマムスロットに挿入し、マキシマムドライブを発動させる。

《ヒート マキシマムドライブ》

通常は使わない、別メモリとのマキシマムドライブ。元々ヒートとメタルは相性がいいため、体への負担が少ない。さらにロストドライブの安定改良の末、基準の運用が別メモリでも可能になった。

シャフト両端を赤い炎が包み、炎華を散らせる。

「行くぜ死神共！くたばりやがれッ!!」

赤く燃え滾るシャフトを強化型ヤミーの胴体に焼き付け、熱い打撃を連続して叩きこむ。

そして最大の一撃をその懐に撃ちこみ、大量のセルメダルと共に爆散した。

「一撃必殺。決まった」

「決めるのならもう少し頑張ってください。増援来ますよ」

地面から生え出るように現れるヤミーの軍勢。さらに奥で待機しているサイの様なグリード。

「こりやハードラックだな。帰らせてもらいたい」

「その減らず口を言えるのなら大丈夫ですね」

するとイクサはモードを転換し、頭部フェイスが展開され、その間から赤い眼光が煌めいた。その際の風圧でヤミー達が吹き飛んだ。

イクサがセーブモードからバーストモードへと変化したのだ。これにより、セーブモードで抑えられていた力を解放し、通常よりも能力が上がる。その代わり装着者への負担は大きい物となる。

イクサは敵の軍勢を見て言い放つ。

「さて、神に命を返却するか。私に殺されるか。選んでください」

その言葉に少しの違和感を残しつつ、彼はモードチェンジで変形した大剣「イクサセイバー」を振り上げてヤミー達に振り下ろした。

すると大きく砂埃を上げ、大量のセルメダルと共に地面を抉り取って空気が晴れた。

モードを一つ上げただけでこの威力だ。教会の力は恐ろしい。

イクサは元会社からライセンスを教会側が受諾し、以降教会側がバージョンアップと強化改良を続けていた。その一つが明の使う「イクサ・バージョンハンター」だ。通称ハンターモード。

「こいつあすげえな・・・」

あまりの威力と圧力に圧倒される。その威力はメタルシャフトのマキシマムドライブを軽く超える物だ。

態度と技だけで戦力外通告されたような気がしたが量産型がうじゃうじゃいる中では俺の力もデカイ方だ。

それなのにこの敵をもつともしない様な振る舞いに少しイラついた俺だった。

《イ・ク・サ・セ・イ・バ・ー・ラ・イ・ズ・アツ・プ》

セイバーに付けられていたフェッスルをナツクルの間に挟み、読み

込ませる。すると電子音と共に剣の青いラインが輝き出し、十字架が光って唸る。

「さすがに数が多すぎますね・・・ここまでの大部隊をここへ集中すると言うのはどうも馬鹿が過ぎている様な気がします」

剣を持った手を振り上げ、掲げる。

「とは言え生きては返しません。これ以上は来ないでしょうしここで終わらせます」

振り掲げたカリバーを敵軍のど真ん中で振り回し、斬撃を叩きこんだ。文字通り、薙ぎ払ったのだ。

一拍置いて、大量のセルメダルがイクサの姿を隠した。それはイクサの周りに集っていたヤミー達の無残な姿だった。あの量を一撃で粉碎するとはイクサは恐ろしい戦力になるだろう。

敵がいなくなり、やけに静かになった状況に違和感を覚えた。

「終わった・・・のか？」

「妙ですよ。嵐の前の静けさのように感じます」

辺りは残兵が少しいるもの、正規兵が対応できる量だ。それなのになんだこの落ちつかない感じは。ここ周辺のマップサーチを行ったが反応は無い。それこそ上空から降下でもしてくるのかと思えば鳥一匹も飛んでいない。

だとすると最悪の事態が予想できる。

「こりゃ既に手遅れかもしれないねえな」

「私も今その考えに至りました。あれだけの量を投入している時点で分かった事なのに・・・」

その時、待っていたかのように地面が揺らぐ。その揺れは次第に強くなり、会場の入り口付近の地面が急激に盛り上がった。

そこから太く長い物体が這い出る。それが巨大なムカデの怪人と分かるまで数秒かかった。

「こいつは・・・」

なぜならそいつは

「デカ過ぎる・・・いくらなんでも正気の沙汰じゃねえ!!」

元々怪人と言う存在の時点で正気ではないのだが、そいつの巨体は

入口の門を遙かに凌ぎ、そばのシヨベルカーをなぎ倒して這い出てきたのだ。実に気持ち悪い。

高さ18mの超巨大ムカデは周辺の正規兵を踏み潰しながらこちらへ突撃してくる。あろうことかそのムカデにイクサは飛び移ったのだ。俺も躊躇しつつ飛び移るがこの至近距離で何をすると言うのか。何より見た目がグロイ。

「どうすんだよこの状況で！」

「これほど大きいのなら弱点は恐らく頭部近くにあると考えましたので」

「何を根拠に？」

「怪人については殆ど把握しています。体の大きい者。特に身長の高い者で胴体が太い怪人は防御と攻撃を両立できる特権を持っています。それらの怪人に共通することは「弱点は頭部付近」だということでした」

「な、なるほど。それで頭を殺れと？」

「ええ、とりあえず」

やけに怪人について詳しいが、弱点があるならあるに越したことは無い。だがこの滑る鎧をどうやって登るかが今の課題だ。変に攻撃したりでもしたら振り捨てられる可能性がある。

これでは二人とも手が出せない。

「射撃武器さえあればな・・・」

頭部を集中砲火すれば何とかなるかもしれない。だが近接攻撃に特化したメタルでは太刀打ちできない。さらにイクサは本来あつた射撃武装を捨ててまであのセイバーを取り付けたようだ。

雑兵共の中には射撃武器を持つ者も多くいるだろうが融通の利かない奴ばかりだ。

何とかならないものかと思つているところにいつも正義の味方は現れる。

ガキユンツ

何かムカデ装甲に当たった様な音がした。さらにその音は多くなり、目の前が激しい発光に染まる。

何かの遠距離武器だと思い、射線の先を見るとメタリックシルバーのライダーが銃を構えていた。

「よお、おつかれちやくん」

俺はその声に聞き覚えがあった。ライダー自体には見覚えは無いが、そのデザインから鴻上ファウンデーション製のライダー系列だと悟った。

「金属よろしくと神父ちゃんか。また妙な組み合わせだねえ」

そう言いつつセルメダルが充填されたバースバスターを撃ち放つ。セルメダルのエネルギーを抽出して撃ち放つバースバスターは初期型こそ反動が強く扱いづらい物だったが新型は無反動に加え他の機器とも連携が取れる優れた物となっている。なお訓練ではわざと旧型を使うことで強い肉体を作り出している。

「作戦開始ということですか。紫朗、足止めをします」

「わあっただぜ。明の旦那ッ!!」

メタルシャフトをムカデの百本脚目がけ投柱。地面に突き刺さりムカデの足を絡ませる。さらにイクサカリバーで脚を数本刈り取り、バランスを崩す。ムカデの巨体が地面に跪くように倒れ、砂埃と共に頭部をさらけ出す。

「頭を狙えー!」

バースに向けて一言言い放つ俺。それをすぐさま理解し、周りの重火器使い達に伝達する。

「全員!あのデカ物の頭に集中砲火してやれ!」

集まった全員が火器を一齐に放ち、赤紫色の頭部に激しい光が逆る。砲火が止んだ時、そこに赤いコアを見ることが出来た。

「神父!あれだ!!」

「行きますよ!」

俺はヒートメモリを入れたままのシャフトでマキシマムドライブを、イクサは腰のフェッスルを取り出してナックルに挟んだ。

《ヒート マキシマムドライブ》

《イ・ク・サ・ザ・ン・バ・ー・ラ・イ・ズ・アツ・プ》

メタルシャフトを振りまわし、赤い炎のリングを浮かばせる仮面ライダーメタル。対してイクサはセイバーの刀身に手を当て、切先まで手を動かしてエネルギーを隅々まで伝達する。

赤と青の輝かしい光りを唸るようにムカデの頭部に叩きつけ、切り刻み、断末魔と共に地面を抉って爆散崩壊した。

「あいつらが来なかったら骨が折れたかもしれないな」

「意外と楽しんでいたように見えましたか？」

爆炎と煙が晴れた時、灰化した残骸が砕け散り、中から大量のヤミーの軍勢が襲ってきた。

まさか本体自体が爆弾だとは思っていなかった俺達はその瞬間に何が起こったのか分からなかった。

「これはッ!？」

神父は驚きを隠せない様子だ。さすがに数えきれないこの量を倒すには相当量の労働が必要だ。ボーナスぐらい出してもらわないと気が済まない。

「訂正だ神父!!肋骨の一つや二つ持ってかれるぞいつア!!」

俺は形振り構わずシャフトを振りまわした。マキシマムドライブはまだ発動状態にある。この威力をヤミーの軍勢にぶつけても大して意味は出ないだろう。だがそれでも俺はミイラの濁流に向かって走り出していた。

「全くあなたは馬鹿ですか!!」

それでも神父は俺の馬鹿に付き合ってくれた。

セイバーとシャフトを交互に当て、道を切り開く。とにかく切つて殴って叩き斬った。

イクサのガントレットに内蔵されてある超小型射出型スパイクで敵を殴ると、敵は電撃刃の痺れで動けなくなった。そこへ俺が鋼の蹴りを入れ、最後にイクサの強化セイバーの刃が煌めく。

爆風に紛れながらセルメダルとエネルギー弾が飛び交ってくる。バース達も援護射撃をしてきているが、いつ誤射されてもおかしくない状況だ。その時

《ドリルアーム》

謎のドリルが援護に入ったのだ。その時のセルメダルの量は異常なほどだった。

バースは自身の体に装備を装着させるメダルクロック「CLAWs」で右腕にドリルを装備したのだ。CLAWsはメダルを回収するために作られた装備で、そのためセルメダルで構成されているヤミーにはダメージが大きい。今の一撃で六体のヤミーがメダルにされていた。

「何メダル相手に手間取ってるだあい？」

「こっちは専門屋じゃないもんでよお。援護頼んだぜ」

「よろこんでえ！野郎共やつちまえ！」

後方で待機していた量産型と思われるパワードスーツ達が一齐にバースバスターを放った。弾幕が降り頻る中、激しい光芒と共にマキシラムドライブを発動させた。連続で発動させるのは今までにも無かったことから少し不安だったが何とか持ち応えれそうだった。

「行くぜー！ヒート！ブランディングスマッシュャー!!」

鋼鉄の体をも包み込む激しい業火を持って駆けだし、軽く宙を舞う。降下時の重力とその体重を生かしてヤミー軍に炎を纏ったメタルシャフトを叩きつけた。

欲望の塊共に炎が燃え移って行き、すぐにその場は炎の海と化した。その光景は地獄のようでもあり、圧倒的勝利の瞬間であった。

「敵の殲滅を確認しました。残存兵は居ないようです」

「これでほんとに終わったか。マジで死ぬかと思っただぜ」

あの数を相手していたのだ。援護兵はいるが実質俺とイクサの二人で相手していたようなものだ。今回の戦いでメタルとヒートでも力が及ばないことが分かった。更なる精進が必要だと染々思う。

変身を解除すると一人の男が俺達へ近づいてきた。持っているベルトの形状から先ほどのバースだろう。

やはり俺はそいつの顔に見覚えがあった。

「やあ久しぶりだ紫朗。こんなところで会うとは・・・数奇な運命つて奴だな」

「俺もてめえの面なんざ見たかねえんだがな。どうやら俺達はそういう縁があるらしい」

俺達だけで話を進めるため、明が物言わぬ顔をしている。

「紹介してくないが、こいつは叡蔵秋悟^{えいくらしゆうご}。俺が昔組んでた戦友だ」

「よろしくイクサのお坊ちゃん。紹介に預かった通りだ。今はバースで戦っているが、俺はベルトコレクターでもあるから基本気まぐれで変身してるよ」

「コレクター、ですか。珍しい趣味をお持ちですね」

その時、神父は顔を顰めて言った。何か叡蔵が気に障る様な事言っただかと思っただが、その思考回路は突然のアナウンスによって掻き消された。

「皆よく戦ってくれた。君達の戦いぶりに敬意を表して私のパーティーに全員を参加させよう。19:00にタワーの中枢フロアで集まろう。以上ッ!!」

爺の元気な声が聞こえて周りの雑兵がほっと胸を撫で下ろす。

俺達は面倒だと愚痴をこぼしつつも切り上げて早々とタワーを上って行った。

五話 「試される世界」

海岸沿いにあったラーメン店に入り、すぐさま入口近くの席に座りこんだ。

「私醬油でよろしく」

「あ、じゃあ俺味噌・・・豚骨で」

「こつてりばつかだね」

「好きなもん食わせろや」

メカニカルなバイクが窓から覗く店でラーメンを二人で食べる。海岸沿いであり人がいないからなのかやはり寂しい気がする。

そんな時、ふとテレビの内容が耳に入った。昔ながらの食堂によくある壁掛けテレビだ。

「昨日ハワイで発生した怪人の暴動事件。偶然現地に居合わせた日本の自衛隊員によって事件は沈静化されましたが。この自衛隊員が使用した兵装が、新たに実装された“改G3システム”というものらしいのですが、専門家の一瀬さん――」

何やら難しい話をしている様であった。ハワイで起こった怪人暴動事件。さらには改G3システム等と言う訳の分からない物まで出てきた。まるで世紀末のようだ。

その後映像も出てきたがどうやら改G3というのは装着型のライダーシステムの一つらしい。機械チックな見た目はファイズにも似ていた。

「あんなのもいるんだね」

「まあファイズだって人が作ったんだからおかしくは無いだろ」

「そっか・・・じゃあそのうちヒロクンも戦わなくて良くなるかもね」

「なんで俺が戦いを止めるんだ？」

「だってヒロクン戦うこと嫌そうにしてたじゃん最初」

昔を思い返すと確かに俺は戦うことが嫌だった。だが今では慣れてしまい、むしろ今では生甲斐でもある。

「戦うことは悪い事とは言わないけど、それでもヒロクンが戦うには理由がないじゃない?」

「戦う理由か・・・」

俺は単にベルトを持ったから。そこに敵がいたから。命の危険が迫っていたから止む負えなく変身したのだ。それなのに今は敵を見かけるたびに変身し、それだけの敵を屠っている。

なら何故戦う? 何故戦う必要があるというのだ?

俺はさつき、ファイズの追加部品を拾った。あの装備が何のためにあるのか、どうやって使うのか、なぜあそこにあつたのかなんて全て分からない。だが俺は咄嗟にこの装備を戦いに使う物だと判断した。普通の人間から見ればただのデジタル時計にしか見えないと言うのに。

既に俺は人を越えている人害なのかもしれないと思い始めてしまった。

「ヒロクンは誰のために戦っているの?」

その問いは酷く簡単で、世界一難しい問題だった。今の俺には答えなど出せない問い。

ラーメンを食べ終わり、俺達は海岸沿いを再び走っていた。また当てのない旅を続けるために。

その間、ずっと先ほどの問いについて考えていた。

「俺からファイズを取ったら何が残る? 俺の役目なんて知らない」

そんな自問自答をひたすらに繰り返していた。その時

「ヒロクンあれ!!」

魅依奈が指を差す先には空を滑空するコウモリ怪人が暴風を放っていた。ここから先にあるのは小さな町だ。都心から2時間で着く過疎化が進んだ誰も襲う気すら思わなさそうな小さな町。

そんな町にコウモリ怪人が何の用だ。

「チッー! こんなところかよー!」

オートバジンを急がせ、コウモリに追いつく。追いついた時にはすでに破壊活動が始めていたところだった。

俺はバッグからギアを取り出し、装着してファイズフォンに「55」のコードを入力してENTERを押す。

《STANDING BY》

「変身ッ!!」

バックルにファイズフォンを押しこみ、水平にして

《COMPLETE》

赤いフォトンストリームに体が包まれ、光芒の後にスーツを形成した。左腕には自動的に先ほどのデジタル時計が装着されている。

俺はファイズフォンをもう一度取り上げ「103」のコードを入力した。

《SINGLE MODE》

ファイズフォンの上画面を変形させフォンブラスターにしてコウモリ怪人に撃ち放つ。第二射第三射と連射し、火花を上げながら落下していった。

すぐにオートバジンで後を追った。そこには大量の砂を撒き散らして歩く怪人がいた。

以前にも同じように血の代わりに砂が出る怪人がいたのだが、後で調べた時に「イマジン」と言うワードが出てきた。恐らく今回もその類の怪人だろう。

「ええい！貴様何者だ!!」

「偶然通りすがった仮面ライダーだ。どこから湧いて出たのか知らないが駆逐させてもらうぜ」

ファイズフォンを開き、オートバジンを変形させた。バイクのグリップを掴み、引き抜く。

ヴオン、とエネルギーの通る音が鳴り、フォトンストリームが伝導

するサーベルが出てきた。ファイズエッジと呼ばれるそれはファイズ専用の近接斬撃武器だ。

「さあ悩みも変化も全部お前のせいにしてブツ倒してやる!!」

コウモリに思い切りファイズエッジを切りつける。派手に火花を散らしてよろつき、さらにもう一撃打撃を加える。

「クソッ！お前などに邪魔されてたまるか!!」

コウモリ怪人は両腕の翼を合わせて突風を飛ばしてきた。さすがにその威力は高く、前へ進むことが出来ない。

その時ふと腕の時計が目に入った。突風が止み、一度時計の使い方を考えて見た。ミツシヨンメモリーがあると行うことはファイズフォンに同じように装着すればいいと思い、特製のミツシヨンメモリーをファイズフォンに押し込んだ。すると

《COMPLTE》

変身する時と同じ音声が流れ、胸部装甲板フルメタルラングがスライド展開され肩部へと移動する。同時に体を流れるフォトンストリームの色が銀色に変化し、開いた胸部装甲の内側で内部構造が露出している。

この変化に俺は驚いたが、そう言っているうちにコウモリオバケが突風攻撃を仕掛けてきた。その攻撃を見切る前に俺は腕のファイズアクセルのスタータースイッチを押した。

《Start Up》

瞬時に攻撃をかわし、身を翻して敵に接近した。その間わずか0.数秒なのだ。俺は移動しながらも驚き、ファイズフォンのENTERキーを押していた。

《EXCEED CHARGE》

エネルギーがチャージされたファイズエッジを連続的に叩きつけ、高速化されいくつもの刃が連なつてコウモリに殺到する。

《3...2...1...》

最後は止まるように速度が落ち、全身が脱力する。

《Time Out》

アクセルメモリーをファイズフォンから引き抜き、ファイズアクセルに戻す。

《Reformation》

胸部装甲が元に戻り、フォトンブラッドの出力色も元の赤色に戻った。

コウモリのイマジンは他の敵と同じように体に「Φ」の文字を浮かび上がらせて爆散した。

だが俺の心は晴れなかった。むしろ様々な疑問が湧いて出た。ま
ず浮かんだ疑問は

「何故、俺はこいつ^{アクセル}の使い方を知っているんだ？」

知っていたわけじゃないはずだった。よくある話で、装備した時に脳内に取り扱いの方法が直接入ってくると言うものがあるが、そう
言ったイメージは入ってこなかった。

まるで

「最初から知っていた...いや、俺は以前にこいつを使った事がある...のか？」

不確定要素が多い、だがそれでいて妙な自信があったのだ。その事に深い不安感を覚える。

俺は煤で汚れた手の平を見た。この手の平は普通の人間がする手ではない。地と泥で汚れた戦士の手だ

「……何が戦士だ、この野郎ツ!!」

地面を殴った。

俺は今まで何をしてきたのかに自信が失せたのだ。この間魅依奈が来た時も何をやってたか忘れていたぐらいだ、ろくなことをやってこなかったに違いない。何もやってこなかった自分に怖くなった。

——怖い？何が怖いんだ？敵に立ち向かうことは別に怖くない。むしろ誰も救えない事が怖い。

瓦礫に埋もれた人間や人質に取られた人間を無残に殺すシーンを何度も見てきた。そのたびに俺は「救えなかった命」を深く意識するようになった。俺が、誰かがそうしていれば救えた命はもう帰ってこない。だからこそ後悔しないために俺はファイズとして戦っている。俺は居ても立っても居られなくなった。すぐにオートバジンに跨り、魅依奈を連れて再び走り出した。

俺が何をしたのかを探すために。俺がこれから何をするかを探すために。

鴻上ファウンデーション本社

「鴻上会長。目標01がスマートブレイン本社に寄りました」
秘書と思われる長髪の女性が社長椅子に座る男に話しかける。

「そうか。と言うことは『アレ』も手に入ったのかな？」

「そのようです。先ほど衛星にてシルバーストリームの発生を検知しました」

面白がるような顔をして顎を撫でた。後ろに向いていて分からなかったが、彼は何かかスマートフォンを眺めていた。

「会長、そちらは開発中のシグマパッドでは？」

背面に「？」の文様が入ったスマートフォンは新たなライダーズギア「シグマギア」の変身部品のようだ。シグマフォン、シグマパッド等呼び方はいくらでもある。

「ああ、その試作品だよ。シグマとは言えないから、シグマゼロ」と呼んでいるけどね」

シグマゼロ。よく見ると？マークの横に漢字で「零」と書かれている。英文字で表さない表現方法はスマートブレインとの決別を表しているのだろう。単体で見るとセンスのいい携帯にしか見えない。

「このベルトが完成すれば世界中のネットワークシステムは我が手の内に入る。そのためなの？だ」

「ですが誰が装着するのです？」

会長と呼ばれる男は不気味な笑みを浮かべてシグマフォンを机にしまった。

「何なら君が装着するかい？」

「いいえ、私などが装着したところで灰化してしまいます」

「確かにそうだな。でも安心したまえ。これはファイズ以上のセーフティを掛けてある。普通の人間がそう簡単に変身などできんよ」ベルト本体はまだ出来ていないようだが既にプロトタイプが出来ていると言うことは完成も近いだろう。

その時はまた、彼女が動き出す。

六話 「欲望の糧」

謎のパーティーが終わり、凝った肩を回しながらタワーを出た。辺りはすでに暗くなっていた。

「それで、今日のお前はなんだったわけ？」

秋悟には変身ベルトの事や何故ここにいたかを色々聞いた。

まず秋悟が戦うために付けていたあのベルトとライダー。「バース」というライダーの改良型らしい。性能は力任せのためメタルと対等程、だがバースバスターを撃つために中身の人間が鍛えられているため並の力ではない。

さらに属性メダル、メダルに描かれている物の違いによって発生するエネルギーを自身に適応させることができるらしい。

バースは彼が最近手に入れたライダーベルトで、そもそもこの仕事の報酬がバース装備一式だったそうだ。

バースと似たようなライダーがいくつか出撃していたが、あれはバースを簡略化且様々な状況に対応できるようにバリエーションを増やした物らしい。通称名は「バーツ」。バースⅡと言う意味と個々それぞれがパーツと言う意味らしい。

「まあ俺が知ってるのはそれくらいだな。もっとも、それ以上の事をお前らに話してバースを取り上げられでもしたらマジコレ共が許しちやおかねえ」

マジコレと言うのは彼が集めているベルトの事だろう。ベルト集めの業界でも秋悟の名はかなり有名だ。

その昔、彼はあるベルトを手に入れるために人を何人か殺めているらしい。今の彼は出所しているわけではなく、正義の限りを尽くすと言う口車で活動しているに過ぎないのだ。謂わば裏技だ。

「それで、あなたはいくらほどベルトを保有しているのですか？」

珍しく神父もとい宮井明が口を開いた。どうやら先ほどから秋悟の事をかなり警戒しているようで、ずっと睨みつけている。物珍しい物を見つけた犬のようだった。

「そうだなあ・・・ざっと10〜20ってところかな」

「そ、そんなに・・・ですか・・・」

「ああそうだ。まあ若干違うのも混じってるが。で、それが何か問題？」

いえ、と話を区切り、目線を地面へ向けて驚いているようだった。俺もまさかそんなに持っているとは知らなかったためかなり驚いている。そもそもそんな量のベルトを世の中に出回らせて良いものなのかと色々突っ込みたいところもあった。

「そういえばシロスケも昔ベルト三つ持ってたよな」

「シロスケって・・・まだ覚えてんのかそれ」

シロスケというのは昔秋悟と組んでいた時のあだ名だ。何かとあだ名を付けたがるこいつは俺にまであだ名を付けて来やがったのだ。ちなみに当時の秋悟のあだ名もといニツクネームは「シユウマイ」

そんな昔話に浸っていると神父が顔を上げて俺を睨んできた。

「あなたまでそんな趣味があったのですか!？」

「いや俺じゃなくてだな・・・おいシユウマイ。てめーのおかげで一人誤解してるやつがいるぞ」

その後神父の誤解を解くのに苦労した。

俺がベルトを持っていたわけではなく、俺の親父が同じようなベルトを三つも保管していたのだ。

二つは俺の持っているロストドライバー。何故か二つも置いてあった。もう一つはロストドライバーに変身スロットを二つ付け足したベルトだった。その後聞いた話では恐らくロストドライバーの上位互換「ダブルドライバー」なのではと聞いた。

一人立ちする時に実家から送られてきたロストドライバーに手を付けたのは二年前の23歳の時だった。

「そんなことがあったのですか」

「まあベルト持ちにも色々事情があるってことだ。ってお前も持つてんじゃねーかよ」

「これは・・・その・・・」

口を閉ざしてまた下を向いてしまったため、何か事情があるのだから

うと察した。だがそれでいてめんどくさい男だった。

見た目は優男でいかにも正義心溢れる奴だが、内心は敵対意識が非常に高い。

「まあいい。それよりお前これからどうするんだ？」

バイクに近寄ってベルトの収納されている荷物を引つ掛ける。イクサの場合はバッグに、秋悟はかなり大きい箱に入れていた。

俺のロストドライバーはベルト部分が自動収納されているため懐に入れていても問題ない。いつもそうして持ち歩いている。メモリは胸ポケットだ。

「予定はありませんしこれからどこに行くかも決めてません」

「ならちよūdいいな」

そう言つて俺は腰のポケットからメモを取り出して渡した。

「これは？」

「俺のお得意先さ、ちよいと人手が足りなくてね。明なら一人で5人も6人も力がありそうだからな」

「私を便利ロボットか何かと勘違いしてませんか？」

それでも彼は承諾してくれたところ優しいのだろう。単に正義を掲げるだけではないようだ。

「よろしく頼むぜ、神父殿」

「どんな仕事かは知りませんが・・・高く付きますよ」

溜め息の後に口角のつり上がる不気味な笑みを浮かべて言った。程々にな、と一言伝えてその日は解散した。

イクサリオンの跨り、光り輝く摩天楼の間を縫って移動する。

所狭しと並ぶビルや人の声は全て私の脳に入ってくる。全ての感覚が人よりも優れている私には人と同じような生活が難しい。生活音、たとえば機械音やエンジン音などは細かいところまで全て耳に入ってくる。そのためイクサリオンは最小限音を小さくしている。

「ここですか」

着いたのは都会の風景に合わない様な小さな喫茶店。夜はバーを

営んでいるようで看板に二つの掲示がある。

喫茶店「風車」かぜぐるま。夜は「ブラッディバー」として営業時間が分かれている。

「いらつしやい」

ドアを開けると懐かしく古風な匂いが飛び込んできた。拭いきれないコーヒーの匂いとカランと奏でる氷の音。

「カラスは巢に戻りましたか?」

「ええ、三又のカラスが帰りましたよ」

カラスが巢に戻る、というのは暗号だ。この問いに対して肯定した者が待ち人と言うことになるのだが。

「ではあなたがそうですか」

答えたのは店主だった。かなりご老人に見受ける。

「ええ、この歳にもなって。あなたこそその若さで戦士をなさっているのですね」

戦士と言うのはライダーの事だろう。この老人も同じライダーなのだ。

「私はそこらへんの金稼ぎのために活動している輩とは違いますよ。それより」

私が本題を言う前に店主がケースを出してきた。

カウンターのの上に置かれた小ぶりなケース、開けると中には小さな機械とUSBメモリーが2本入っていた。

小さな機械は一目でロストドライバーだと分かったが、2本のガイアメモリには見覚えが無かった。

「このメモリは見た事が無いですね」

一つは青いメモリ、もう一つは黄色いメモリだった。

「青はトリガー、黄はルナ。相性の良いメモリです」

「なるほど。ガイアメモリにも様々な種類があるのですね」

「ええ、ではお願いします」

「わかりました」

話を進めるが、私の本職は運び屋だ。特に重要な物を運ぶのが主な仕事だが、最近はいくサでの戦闘が多かったことから護衛や討伐の仕

事の方が多かったのだ。そこへ舞い込んできた依頼が『ライダーベルトの輸送及び護衛』だった。

「ところで護衛と言うのは？」

及び護衛というのが気にかかり質問をしてみる。

「いや大したことではないのですがね、私も孫の顔を久しぶりに見たくありません。ついでに連れて言ってくれないかと」

実はこの依頼を貰ったのは数ヶ月前なのだ。そこから仕事を始動するまでの間にころころ内容が変わっていた。恐らく私のスケジュールが合わない事で色々迷ってしまったのだろう。

「わかりました。ではまた明日の朝にここへ」

「ええ、私もずっとここですから」

すでに時刻は夜の10時。路地で騒ぐ若者の声が徐々に黒い声へと変わって行った。

イクサリオンを走り進めて数分。中華街に差しかけたところで事件は起きた。

明りの消えた中華街から発砲音が数発鳴り響いたのだ。確認のため中華街へと侵入すると

「何の用だア？」

いかにも腐りきった化け物の声が聞こえた。瞬間、目の前を刃が飛翔し、空気を切って行った。

周りを見渡せば臭い若者達が何人か倒れていた。出血の量からして恐らく死んだだろう。拳銃を所持しているところを見るとお化け屋敷感覚で怪人のテリトリーに踏み込んだのだろう。

「こんな時間にあなたこそ何の用があるのです？」

「質問に質問を返すか・・・嫌いじゃねえぞその面」

月明かりにうつすらと浮かび上がるのはカエルのような粘液で滴る不気味な顔だった。

灰色をしており、地面の色と同化しているようだった。

「はて、私はどうしたらいいでしょうか。ここであなたを倒すか、見なかったふりをして帰るか」

「そりゃこつちとしたら見逃してほしいがよ、面妖な俺じゃどうも

息がしにくい世の中なんぞな。いつそ殺してくれた方がマシなんじゃねえかと最近思い始めたわけだ」

「では殺して帰れと？」

カエルは岩の様に重い腰を上げてこちらに歩み寄ってきた。体長は私とさほど変わらない。だが横に大きいためその大きさを体全身で表している。

「いや……そうだな。あんたがどれほど優しく御人好しかを見極めるために、ちとゲームをしないか？」

「ゲーム？どうするんですかそれは」

「俺がお前に『手下にしてこき使わせてくれ』と頼む。そこでお前は どう動くか、ってゲーム、いや賭けだな」

「私は他のライダーのように御人好しじゃないかもしれませんが、それでもやりますか？」

「どの道死ぬんだ、だったら面白い物見てから死にてえだろ？」

岩肌は笑った。表面を見ただけでは何も分からないが息遣いがそう伝えていた。

ライダーをやっている私はライダーを好んでいないのだ。だからといって怪人派と言うわけではない。噂でもある通り、私は自神教者なのだ。自分以外を決して信じない。

だがこの時私は不服にも楽しさを忘れられなかった。

少しの間を持って

「いいでしょう。あなたを私の下僕としてこき使ってあげるとしましよう」

「おつ、意外と善人なこつて」

「元より怪人のサンプルの一体や二体を欲しいと思っていました」

「早速毛皮扱いかい？慈悲もひつたくれもありやしねえな」

不快だが私は笑った。

酒臭いカエルの化け物を一刻も早く清めてやりたかった。そう、私の求めた正義の象で――

七話 「時を駆ける列車」

「クソツ!!なんでこんなに居るんだよ!!」

今俺は複数の敵と戦っている。場所は先ほどの町からさほど遠くない砂浜だ。

海岸沿いを走っていると突如目の前に砂状の敵が現れ、それが形状を持って襲いかかってくるのだ。

「死ねエ!!」

ネコ型の怪人が爪で攻撃してくる。それを俺はファイズエッジで受け止め、胴体部に蹴りを入れて押し返す。

後ろにも存在を察知し、カニ型の敵に対してエッジを叩きつける。だがそれでも持ちこたえたカニ怪人は大きなハサミを胸部に切りつけて反撃をしてくる。

「グハア!...クソ...」

ファイズエッジを地面に突き付けて体を持たせる。連戦により体に疲労が溜まってきていた。

アクセルモードは先ほど使ったため今は使用できない。オートバジンに魅依奈を守らせてついでに援護射撃も頼んではいるが、俺が敵陣の中心にいるため迂闊に射撃も出来ない。

「ヒロクン!!」

ネコ型とカニ型とウシ型の三体の敵が俺の周りを周回する。完全に舐められた戦いだつた。

無造作に剣を振りまわしても受け止められるか避けられるか。もはや完全に出せる手を失っていた。

そこに

フアアアアアン!!

「なんだあ?」

謎の汽笛と共に周りの怪人達が吹き飛んだ。さらに砲撃音が続く、

火花が派手に目の前を照らす。

目の前が落ちついたとき、砂浜に堂々と流線形の列車が停車していた。赤と白の特徴的な列車だ。

「これは……」

列車から降りてきたライダーはパスをベルトに押し当て、左手に持つ剣を振りかざす。

《フルチャージ》

振り下ろした剣の剣先が飛んでいき、取り囲んでいた敵怪人を次々に撃破していった。

「俺の必殺技……パート3」

赤いライダー。その立ち振る舞いは戦闘を幾度も経験した連戦の戦士だった。

「クソー……いつ電王だ!」

このライダーを見てネコ怪人が「電王」と言った。それを聞いた他の怪人たちが驚き、ウシ型怪人が電王に対して角攻撃を仕掛けた。

「うおおおお!!」

だがその突進は電王の蹴りによって岩へと進路を変えられてしまう。

「ぶつかってくるならもっとマシンな攻撃をしやがれウシ野郎」

数度の斬撃を入れてから角を引っ張ってネコ型へ押し渡す。さらに挑発を入れて攻撃を誘うがカニの怪人が逃げようと海へ飛んだ。

「カニが飛ぶな!」

側の岩を蹴り飛ばし、カニ怪人に見事命中した。砂が落ちたと言うことはあれもイマジンののだろうか。

カニ怪人はなんとか海の中へと潜り込み、脱出に成功したようだった。

「めんどくせえなあ。おいテカテカしてるお前!」

「……俺か?」

「お前しかいねえだろ。ちよつとの間こいつらを頼んだ」

そう伝えた後、電王はベルトの青いボタンを押してパスをかざす。

《ロッド フォーム》

電王の各部を構成していた装甲が外れ、それぞれの順番が変わって体に連結した。その後から頭部ライダーフェイスが降りてき、全体的に青を基調とするフォームが出来あがった。

「まったく。先輩も泳げるようになりましよようよ」

先ほどとは喋り方が違う。さっきのガサツな声ではなく、おっとりとした青い声だ。

電王は持っていた剣を分解し、別の形態へ合体させた後にいきなり釣りを始めた。

「釣れるまで時間がかかりそうだねえ」

「ちよ、調子のりやがって!!」

ネコイマジンが爪を立ててこちらへ斬り込んできた。それをエツジで振り払い、射線上に誰もいない岩場へ動かす。するとお利口なオートバジンはすかさずバスターホイールに内蔵されてある16門ガトリング砲を乱射。ただ撃たれて消えると言っただけの最後を迎えたネコイマジンは声にならない断末魔を上げて爆砕した。

そして次の攻撃を繰り出すために、ファイズショットを装備、ミツシヨンメモリーを差しこんでファイズフォンのENTERキーを押す。手慣れた手つきでセットを終わらせ、殴りに掛る。

「やめ——」

流れ作業で懐にグランインパクトを撃ちこむ。その巨体が仇となり、自らの死を招いたのだ。

Φの文字を浮かび上がらせて砂に散った。

「じゃあこっちも片付けちゃおうか」

掛かった獲物を釣り上げ、空中に浮いた敵に長い釣り竿を突き差す。パスをベルトにかざし、二度目のフルチャージを発動させた。

イマジンに突き刺さったロッドに青い陣が浮かび上がり、その場に拘束した。電王が飛びあがり、拘束された敵目掛けて足を突き出し、

突き刺さるロッドに蹴り入れた。

衝撃で敵は爆発し、電王は優雅に着地した。人差し指と親指でつまむ様な仕草をしてこちらを見る。

「君が乾浩人、だね？」

「そうだ。俺に用があつたのか？」

「まあね。君を連れて来いってオーナーに言われたからさ。まあ後は頼んだよ良太郎」

ベルトを外し、中の人間が露になった。

そこには今まで想像していた人物とは全く違う人間がいた。

「初めまして、だね。僕の名前は野上良太郎」

弱そうな声と俺と同じくらいの身長。歳は19〜20といったところか。あの動きをこの少年がするには人格でも変えない限り無理だ。

「色々事情がありそうだな・・・」

半分何が起こっているのか理解が追いつかないところもあるが、それでもどうする事も出来ないので誘われて停車していた電車に入った。

電車の中はカウンターがあり、無数の席が並ぶ喫茶店のような内装だった。その奥の一角に進み、旗付きチャーハンを上品に食べる老人が堂々と座っているが、こちらの存在に気が付くとまじまじと見つめてきた。

「時の列車デンライナーへようこそいらつしやいました」

「デンライナー？この電車そんな名前なのか」

「ええ、そう思っていただけで結構です」

この老人もそうだがこの電車にはおかしな奴が多い。というよりは半分がイマジンだ。赤鬼、青面、黄猿、紫顔。どれも個性的だが何も言わずにここに居るのはどうかと思う。

不審に思っていると

「このイマジン達は僕達の仲間だから心配しなくて良いよ。たまに喧嘩して暴れるくらいだから」

「そうそう、何も怖がることは無いわ。何なら追い出そうか？」
俺よりかなり身長の低い少女が話しかけてきた。見た目中学生ぐらいの少女だが言い方がかなり大人ぶっている。

「私はハナ。今はこんな姿だけど本当はもつと大人なんだからね」
「頭がこんがらがってきたあ・・・」

後ろで魅依奈が悲鳴を上げて椅子に座りこんだ。ハナと言う少女が魅依奈を見守り、俺達は話を進める。

「それで、俺に何があるって？」
チャーハンの残りが少なくなってきた。それでも旗を取らずに食べ続けているのは何かの挑戦だろうか。

「あなたは何故か時間に干渉しているのですよ。それで少々事情を聴きたくお呼びしたのですが。どうやらその様子だと何も知らないようですね」

「時間に干渉？」
「ええ、あなたを中心に時が動いていると言っても良いでしょう。それが原因で時の運航にタイムラグが出来ているのですよ」

デンライナーの仕組みについて長々と説明が入った。その最中にチャーハンの旗が倒れ、オーナーが変なポーズをしたのはスルーした。

デンライナーと言うのは鉄道型のタイムマシンのことで、それらを類呼した物らしい。その一つがこの列車「ゴウカ」だ。

そして今、時の運航で行けない時間軸があるらしく、現在進める時間軸がこの軸までしかないそうだ。

「俺にどうしろと？」
「それが私どもにも分からないのです。なので精密な検査を行いたいのですが、御同行お願ひできますか？」

「別にいいぜ、俺も自分に何があるか見たいしな」
「成立だね。じゃあ僕は君達のバイクをデンライナーに積んでくるよ」

「おいハナクソ女。お前も行ってやれよ、あいつ一人じゃ多分無理だぞ」

赤鬼がハナに喋りかけた。だが顔面を殴られてハナは出て言った。
「痛ってえ．．．おい何じろじろ見てきてやがる」
「先輩も態々喧嘩ふっかけないでくださいよ！」
賑やかを通り越して騒がしい所だ。イマジンが四体もいるのにもかかわらず何故こうも平気でいられるのか自分でも不思議だった。
後の話でイマジン達は電王に変身する際に良太郎に憑依することが分かった。変身の仕組みと性格の変化の謎が分かってスッキリした。

ターミナル

デンライナーでの時の旅は粗末なものだった。一面砂と岩しかない絶望的な風景だからだ。それでも粘土細工の様なコーヒーは格別美味かったが。

デンライナーはそんな砂漠の世界の駅に到着し、広い駅内を歩いていた。

「どくもく」

ガラツとしたホームでデンライナー一行と待っていると突然物音がして自動扉から駅長服を着た老人が歩いてきた。その顔を見て俺は驚愕した。

「え．．．あれ．．．?」

オーナーと駅長が握手を交わした時、確信に変わった。二人が同じ顔をしているのだ。双子かドツペルゲンガーか、何れにせよ二人は似過ぎていて。そろってこちらを向かないでほしい。こっち見んな。

「やあやあ君が件の少年だね。待っていたよ」

駅長に連れられ、全員で向かったのは地下。こんな駅に地下室があることが驚きだったのだが、それ以上に驚く物が奥にあった。

着いた場所は中心に噴水がある大広間。その奥の壁に等身が映る程の大きな鏡があった。

「この鏡、実はいわく付きなんですよ。映った姿と別の姿が映るのが気味悪いと言われ引き取ったんですよ」

「何が映るんだア？」

赤鬼のイマジン『モモタロス』が駅長に問いかける。見て見れば分かると言うのでモモタロスが鏡の前に建つ。

「ああ？砂ん時の俺が映るじゃねえか。気持ちわりい」

人間に憑依前に出現する砂状の姿が映っていた。人の記憶に支えられないと実体すら持てないのがイマジンの特徴だ。イマジンには人に取り付き、望みを乞う。望みを叶えた暁には取り付いた人間から記憶と時間を我が物にする。

他のイマジン、ウラタロス・キンタロス・リュウタロスも同じように鏡の前に立ってみたが映り方も同様だった。

「なんやこれエ？気色悪いな」

「じゃあ今度は良太郎立ってみなよ」

「うん」

良太郎が鏡の前に立つ。先ほどまでの感覚では映るものが砂状に表示されるのかと思っただが、良太郎の場合は違った。

「あれ？駅長さん、これどういう…」

「はい、その顔を待ってました」

鏡に映る良太郎の姿、それは何も無い、だった。

姿も影すらも映っていない。背景や遠くにいる俺達の姿は映っているのに鏡の前に立つ良太郎の姿だけが映っていないのだ。

「この鏡はですねえ、鏡の前に立つ者の未来を映し出すのです」

「未来？ということとは僕の未来は無い、ということですか」

「いいえ、その鏡に良太郎君が映らないのは未来が予想できないからです。特異点である君には未来をどうにでも変れるのですよ」

一通りの事を説明し終わった時、駅長がさあと言って俺に手を差し伸べてきた。その時の俺にも大体予想はついてた。この状況、この手際で呼び出され、鏡の前に立たされると言うことは…

「やっぱり…」

ハナが思わず口に出した言葉はその通り。俺の姿は鏡に映っていない。つまり俺も良太郎と同じ「特異点」なのだ。

特異点はその時代に居ても時間の流れに影響されず、その時代に対

して様々な影響を及ぼすことができる扱いどころによつては世界を崩壊しかねない存在だ。

「やはりあなたにも特異点が備わっていましたか。しかし妙なものですね。あなたも仮面ライダーとは」

「・・・何が言いたいんです?」

その答えはオーナーからではなく駅長の口から発せられた。

「実はですね、現在この駅には関係者以外の者が誰一人いないのですよ。それは時の運行が一時的に停止している為です。一言で申すと現在の列車は機能を失っております」

「はあ!?何言つてんだドツペルゲンガー!それじゃ俺たちはどうやってここまで来たんだよ!」

モモタロスが荒げた声で物申した。無理もない。正直俺は大量に流れ込んでくる情報に対処しきれていなかった。だがモモタロスたちイマジンはこの状況を誰よりも理解していた。

「ですから“一時的”にです。この場所での一時的の意味は局所的な時間のみのことを示唆します」

捻った言葉を並べるために誤解の誘発が起きそうであった。だが俺にもなんとかくは理解できた。

「つまりどつかの時間がダメになつてることか?なんとなくな答えなんだが」

「まあそんな感じで理解していただければ。正確な時間はあまり分かつてはいませんが、主にこの時間軸から未来への時間軸が通行止めになつております」

「それってまたレールが捻じ曲がったりしてる、とかですか?」

良太郎が聞くが、俺はその捻じ曲がったレールという物を知らないため理解できない。

「詳しいことはまだこちらでも把握できていません。ですがハナちゃんのように時間軸そのものが消滅することもあり得る話です。それに最近では時間の揺れが激しいので何が起こっても不思議ではありません」

「時間の揺れ?」

「ええ、原理はよく分からないのですがつい最近発見された不具合でして、ゲームでいうところのバグのような物で、時間がループしたりするので。まあ数分の差ばかりですのであまり気にしなくても良いかと」

「なんかよくわかんねえ話しやがって、キリねえから要件だけを言え、要件を」

モモタロスがややこしい話に終止符を打って急がせた。トイレでも近いのかと思ったが単にイラちなだけのようにだ。

「よろしいでしょう。私共がお願いしたいのは一つ」

砂ばかりの風景の空間でデンライナー一行はその言葉に角を立てた。

「時を破壊してほしいのです」